二〇二三年度
群馬県立女子大学　文学部　美学美術史学科
後期入試問題

小論文

試験時間は十三時～十四時までの六十分です。中途退室は認めません。途中で気分の悪くなった場合は、黙って手を挙げて下さい。

問題用紙はこの表紙を含めて三枚、解答用紙は一枚です。それぞれが配られたら、指示に従って、解答用紙の所定の欄に受験番号と氏名を記入して下さい。試験開始の合図があるまで問題用紙の表紙をめくって問題を見てはいけません。

受験番号と氏名を記入し終えたら、静かに試験の開始を待って下さい。

問題

次の文を読み、問いに答えなさい。

二十世紀初頭のアヴァンギャルディストのひとりであるマルセル・デュシャンは、とあるアンデパンダン展に、白い陶製の便器に『泉』というタイトルを付けて出品して拒絶されます。その理由は、なによりもこの作品なるものが、芸術家の手によって作り出されたものではない、機械的に生産された既製品であったということです。しかも、ものがものですから、たちまちスキャンダラスな話題となりました。このデュシャンの実験的な芸術の試みをフランス語で「オブジェ・トゥルヴェ objet trouvé」、つまり「発見された物体」と言います。デュシャンは自分を囲む日常の世界のなかでこの物体を「発見」し、そこからこれを取り出して展覧会という場に展示することによって「芸術作品」を作り出そうとしたのです。この企ては確かに、それまでの常識とされてきた手作りという意味での技術、つまり芸術（美の技術）の在り方を否定するものであり、そこからしばしば「反芸術」と呼ばれてきました。しかしそこには新たな「発見の技術」が認められます。たとえば、海辺に流れ着いた流木のフォルムに面白さを感じて家に持ち帰り、これを床の間に飾ったりすると、自然のままの流木がまるで芸術作品そのもののようなオーラをもって見えてくることがありませんか。これもわたしたちが普段に経験する「発見の技術」のひとつのあらわれと言うことができます。デュシャンのオブジェにしろ、自然のままにあるものにしろ、「発見された物体」をもともとそれらが存在していた文脈から取り出し、これを「芸術作品」として眺められる場に「転置あるいは置換すること（デペイズマン dépaysement）」、つまり「発見」を際立たせることによって、生じてくるこうした芸術化の作用、あるいは効果のことを「異化効果」と言います。さまざまな「芸術作品」が蒐集展示されている「美術館」とは、さしずめこのような「異化効果」がそこに生じる巨大な装置であり、場であると見ることもできるでしょう。

（神林恒道「「芸術」の始まり」、原田平作・神林恒道編『芸術の楽しみ やさしい芸術学』、晃洋書房、一九九六年）

※出題に際して、一部表記を改めたところがある。

問い

本文を要約した上で、それに対するあなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。